走り読み文学探訪リバイバル(その38)

「出エジプト記」旧約聖書

訳　関根正雄

紹介者：榎本博康

[紹介]

イスラエルの人民（ヘブライ人）はエジプトに移住した。以来約400年、平和を保っていたが、新しい王が即位すると、王はヘブライ人を使役して強制労働に就かせた。そのため人民は疲弊した。

さらにモーゼ誕生を予見した王は、ヘブライ人の男の新生児を全て殺すように命じた。誕生したモーゼは、両親によってパピルスの箱船に入れられてナイル川に流された。川で浴(ゆあみ)みをしていた王の娘がその子を拾って彼女の養子とした。

長じてモーゼは、エジプト人がヘブライ人を暴力で酷使している様子を見て怒り、これを殺して埋めた。お尋ね者になったモーゼは逃亡してミデヤンに逃れ、そこで妻子を持った。

昭和44年の初版本（往時のパラフィン紙カバー付きだが、写真映りのために外して撮影）

ついにヘブライ人の辛苦の叫びは神のもとに達した。神はモーゼに現われ、自ら名乗った。そしてヘブライ人達をエジプトの地から導き出すよう、彼に命じた。また神はパートナーとしてアロンを付けた。二人はエジプトに帰り、王との交渉を始めた。時にモーゼ80歳、アロンは83歳であった。

神はモーゼ達に命じて行わせた激しい数度にわたる交渉の末に、エジプト人の首子(ういご＝初めに生まれた子供)を身分に係わらず総て殺害した。とうとう王は折れてヘブライ人達を去らせることに同意した。

彼らは葦の海に向かった。一方心を曇らせた王は、モーゼ等を軍勢に追わせた。モーゼが海に手をかざすと海は左右に分かれ、ヘブライ人達はそこを渡渉した。エジプトの軍勢が入ると、海は閉じて、軍は全滅した。

モーゼ達は旅した。3ヶ月後、シナイの荒野に至った。神がシナイ山に降り、山は火山のように震え、煙った。モーゼは神に会うためにひとり山に登った。そして神より十戒をさずけられた。彼らの旅は続き、約束の地に達したのは40年の後、モーゼ120歳の時であったという。

[感想]

この話を紹介した理由は、走友ドン･マックネリ氏の80歳の誕生日を祝福するためである。モーゼの真の仕事は80歳からであった。ドンもこれからが本当の自分の人生かもしれないし、

Copyright © Enomoto PE Office, all rights reserved.

是非そうして欲しい。約束の地に達するには、長いながい旅が必要だ。

所で、このエジプトの王は第19王朝のラムセス二世(在位BC1292～1225)と言われている。ヘブライ人を酷使してアブシンベル神殿などの大工事をしたので有名だが、それでも足りなくて、例えば建造物のツタンカーメンの名前を削り取って自分の名前を入れたりしたらしい。

この話の冒頭で、王の娘がモーゼを拾って彼女の養子としたとあるが、我々の感覚では子供が突然一人増えたら大いに問題であり、奇異に感じる部分だ。だがラムセス二世は、第一王妃のネフェルタリをはじめ正妻が4人、側室が500人、子供が150人。これでは娘の一人が赤ん坊を拾ってきても分からないはずだ。

神はモーゼを選んでラムセス二世との交渉にあたった。モーゼは神の言葉を伝える者なので、預言者と呼ばれる。最初、モーゼは口下手で自信がないと断るが、神は自分の言葉を教えた通りに言えば良いと説得する。神のネゴシエーションは過酷だ。始めは杖をワニや蛇に変えるが、王の魔術師達もその位はできる。奇術のレベルだ。次にナイル川を血に変えた。またナイルを蛙で満たした。ぶよ、あぶ、そして家畜の疫病。ここに及んで王の魔術師達も一緒に病気になりリタイヤした。次は霰を降らせて農作物に壊滅的打撃を与えた。王は譲歩したが、災厄が去ると心を変えた。そしていなごの大群で追い討ちをかける。エジプト全土を3日に亘って闇にした。ついに総ての首子の殺戮により、最終結論を引き出す。我々の商業ネゴでは、当然ここまではできないが、例えば最後の切り札までに、多層的な交渉を準備したこと、より良い条件のために途中で手を打たずに最後まで相手を引っぱって行くなど、参考にすることができる。

さて、ヘブライの民は荒野の旅に疲れて、モーゼに文句を言う。エジプトの奴隷であれば、食べ物も住む所もあり、困ることは無かったのにと。なぜ約束の地に着くのに40年もかかったのか、ここにこの答えがある。地図で見ても道程自体は大したものではないと思われる。むしろ永年の間に染み付いた奴隷根性を捨てて、民族として自覚し、自立に至るには、その位の年月と世代の交代が、奴隷時代を知らない世代の台頭が必要であったのではないだろうか。

この映画を子供の頃に見た。もう一度見たかったが、近所のレンタルビデオ店になかった。海が開いて人々がそこを渡るのだが、人々の歩む海底が砂漠なので奇異に思ったことを憶えており、本当にそうだったか確認したかった。

(初稿2001.2.15)

[リバイバル感想]

議論が多いであろう宗教の話を採用した、昔の自分が元気というか、無謀であることに驚く。宗教はそれを信じる人々の心の拠り所であり、よそ者が論じるべきではないのだ。そこで映画「十戒」の話にしよう。

映画「十戒」(1956年)を観たのは小学生の頃だ。日本では1958年公開らしい。記憶では兄のお供だったような。昔の映画館は指定席では無いので、上映が終わる少し前に入館して、席が空くのを目ざとく見つけて確保する。煙草の煙がもうもうたる館内でいきなり観たのは、有名な海が分かれる場面であった。やがて席を確保し、最初から鑑賞する。今調べると上映時間が232分と、とてつもなく長い。見慣れた日本の時代劇やアメリカの西部劇と全く違う世界で、驚きの連続であった。

Copyright © Enomoto PE Office, all rights reserved.

まず憶えている場面は、やがて王に敵対することになる者が生まれたことを知った王は、全てのヘブライ人の男の幼児の殺害を軍に命じる。兵隊たちは幼児を見つけては剣で突いて殺害し、母親達は泣く。そしてモーゼの母は難を逃れるため、嬰児を小さな葦船に乗せて川に流し、王宮の敷地内で王女に拾われる。エジプト人とヘブライ人の外観は似ているのだろうかと怪訝に思ったが。

途中はどーんと端折って、シナイ山で十戒を授かる場面だ。神の雷（いかづち）が岩板に十戒の文字を刻む。どんな高尚な言葉が刻まれるかを期待した。最初の方は神から人への命令であり、極めて宗教的な内容で、当時の私には理解不能であった。後の方になると、殺してはいけないとか、盗んではいけないとか、嘘はつくなとか、極めて人間界での日常的かつ基本的な内容であった。当たり前のことを神の雷で仰々しく岩板に刻んでいく。何でこれがそんなにありがたいものなのか。

当時の日本は敗戦から10年と少し、社会が落ちつきを取り戻していたが、それ以前であっても、駅前や交番に「他人の物を盗むのは止めましょう」という類のポスターが掲示されることは無かったと思う。（「空き巣注意」はあったが。）モーゼの時代では、道徳という概念が未発達であったということか。神に言われなければ、人とは誰でもそのように極端な自分本位であるものか。

でも今では分かる、現代でも十戒は色あせていないことを。例えば経済システム等において、搾取と富の異常な集中が行われているからだ。これは他人のものを盗んでいることに通じるだろう。そして戦争では大量の殺戮が正当化される。

しかしもう一度十戒を文脈に沿って読みなおすと、これは恐ろしい内容であるかもしれない。「１．主が唯一神であること」。これを受け入れた人々が「６．汝、殺すなかれ」の対象者であり、異教徒はここで言う神との契約外であるから、殺すことに何ら制限がないとも読めてしまう。まさか、そんなことは無いと思うが。（注：あくまでも映画の感想です。）

(2021.8.09)

Copyright © Enomoto PE Office, all rights reserved.